

「BOOK便」で活躍中

—国立大学法人山口大学—

職場
ルポ



●特集●地域で支える〜学校から働く場へ〜

(文 清原れい子 (写真) 小山博孝



取材先データ

国立大学法人山口大学

〒753-8511 山口県山口市吉田1677-1
TEL 083-933-5000 FAX 083-933-5013

Keyword : 特別支援学校、障害理解、職務創出、職域拡大、業務体制の工夫・改善

- ① 支援員、障害者からなる「業務支援室」を設置。「BOOK 便」など、大学ならではの業務を切り出し全学的にアピール
- ② 働くルール、社会のルール、マナーを教え、十分な訓練をする
- ③ 指導者が働く姿を間近で見せることが、仕事の教え方の基本

WORKSHOP REPORT

業務支援室を設立。 支援員が礎を築く

山口大学は、長州藩士・上田鳳陽によって創設された私塾「山口講堂」を源流として、2015（平成27）年に創設200周年を迎えた。人文学部、教育学部、経済学部、理学部、農学部など7学部がある山口市・吉田キャンパスのほか、宇部市に小串キャンパス（医学部）と常盤キャンパス（工学部）がある。

約22万坪という広大な吉田キャンパス内で週3回（月・水・金）、障害のあるスタッフたちが総合図書館に届けられた研究図書を教員に配達する「BOOK便」。山口大学のキャラクター「ヤマミイ」入りのポロシャツを着て、書籍が入ったコンテナを積んだ台車を押して各学部を回る。今回は、2012年から始まったBOOK便の試みを中心に紹介する。



総務部人事課長の梅田則好さん



業務支援室の吉本和弘さん

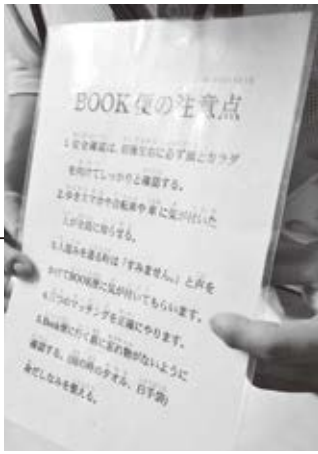
山口大学が障害者雇用にも本格的に取り組み始めたのは、2010年のことだった。総務部人事課長の梅田則好さんに当時のいきさつをお聞きした。

「それまでも附属の特別支援学校の卒業生などを雇用していましたが、雇用率に達していませんでしたので、地元のハローワークの指導を受け、2010年度に総務部人事課に『業務支援室』を立ち上げました。BOOK便は障害者雇用を全学的にアピールするチャンスだと考えて引き受けましたが、それ以降各学部からの依頼が入るようになり、現在は縁石清掃、BOOK便、花壇づくり、事務補助作業などを行っています。本学は障害者雇用に関して進んでいると思いますし、支援体制なども充実していると思っています。暑いときの縁石清掃や花壇の整備はたいへんだと思いますが、キャンパスがきれいになっています」

業務支援室の設立時、障害者教育を専門とする同大学教育学部教授の松田信夫さんのアドバイスを受けながら、業務内容や支援体制を整えた。業務はまず、毎年秋から冬にかけての膨大な量の落ち葉や、雨のあとに堆積する土砂の処理などの構内清掃を行うことを考えた。また、障害のある人たちが安定して働き続けられるようにと、仕事面・精神面での適切なサポートの経験がある2人を「支援員」として雇用した。

業務支援室の設立にあたり、山口大学で主にネットワーク構築の業務にたずさわっていた、聴覚に障害がある吉本和弘さんが異動してきた。業務全般の指導をする技術指導員としての役割もない、現在は事務も担当している。吉本さんは、知的障害の人たちと接するのは初めてで、いっしょに働くことに最初は戸惑ったという。

「耳が聞こえにくいということもあり、『障害者の心情がわかるだろうからサポートしてください』と当時の人事課の担当者からいわれましたが、それぞれの個性にどう対応したらいいか、わかりませんでした。そのとき、支援員に『わからなくてもいい。スタッフと一緒に働いてください。一緒に働くと、その人の個性や特性がわかってきます。できることができたらほめてください。できないことがあ



「BOOK便」村田チーム、出発前のチェックと準備



村田啓造さんを先頭に、安全を確認して配達先の学部をみざす坪井康紀さん、齊藤健一さん

「最初は、構内の落ち葉拾いと緑石清掃が主な仕事でしたが、働くルールや何のために働くのか、なぜ働くのかを時間をかけて教えました。特別支援学校である程度の教育は受けていましたが、社会経験が少なかったので、あいさつの仕方、部屋の入り方など、社会のルールやマナーも一から教えました。学校の先生や希望する保護者にも職場に来てもらい、スタッフと一緒に『働くとは?』の座学や、作業を体験してもらいました」

「最初は、構内の落ち葉拾いと緑石清掃が主な仕事でしたが、働くルールや何のために働くのか、なぜ働くのかを時間をかけて教えました。特別支援学校である程度の教育は受けていましたが、社会経験が少なかったので、あいさつの仕方、部屋の入り方など、社会のルールやマナーも一から教えました。学校の先生や希望する保護者にも職場に来てもらい、スタッフと一緒に『働くとは?』の座学や、作業を体験してもらいました」

2010年12月に6人、2011年に5人、2012年に2人、2013年に1人、2014年に4人と、障害のあるスタッフが増え、現在17人。身体障害と精神障害の人が2人ずつ、知的障害の人が13人で、山口大学附属特別支援学校の卒業生が多い。年齢は21歳から44歳。1日6時間の週5日勤務で、待遇は非常勤職員。健康保険、雇用保険、厚生年金適用で、時間給は経験により少しずつ上がっている。退職者は腰痛のためやむなく、という1人のみで、定着率は高い。業務支援室のほかに、山口大学では教員、事務職員、事務補佐員など20

人の障害者が働く。雇用率は2017年3月末では2・43%である。

確実にていねいに、 注文図書を配達

「BOOK便」は、注文した研究図書をなかなか受け取りにこない教員がいることなどから、総合図書館から人事課に話があり、業務支援室で配達を引き受けることになったのが始まりだ。

2012年1月からのBOOK便開始にあたり、前年11月から学部の名前と場所、ルートの確認、配達中の安全確認、台車とコンテナの扱い方、各学部窓口でのあいさつ、報告の仕方などの訓練をした。当時のことを吉本さんに振り返ってもらった。

「始めるまでの2カ月間、事前指導にあたりました。挨拶、報告に重点を置きましたが、毎日練習しても、きちんとできるようになるまで約1カ月かかったと記憶しています。一番たいへんだったのは、各学部の場所がわからなかったことです。学部の名前が読めないのです、何度も行き来をして、学部の名前と場所を覚えることからスタートして、回るルートを教えました」

BOOK便は、3人ずつの2チームで行っている。全員がこの仕事にたずさわれるように、と原則1年ごとにメンバーを交代してきた。

総合図書館で書籍を受け取り、出発準備。
室長の有吉義和さん（奥）が見守っている

WORKSHOP REPORT



配達リストで確認して、メールボックスに入れる



務支援室長の有吉義和さんがついていく。「図書館の職員が『この本は、何々学部
の何々先生の所に配達してください』と

午後1時。正門から入ると、
キャンパスのほぼ中央、共用棟
A2階の業務支援室前に、「B
OOK便」のビブスをつけて村
田啓造さん、坪井康紀さん、齊
藤健一さんの3人と、もう1チ
ームが集合した。身だしなみ、
忘れ物がないかなどのチェック
後、総合図書館に向かう。私
たちは、この「村田チーム」に
同行した。

キャンパス内は車や自転車が
頻繁に通るため、随所に横断歩
道がある。そのたびに立ち止ま
り、「右よし、左よし、前よし」
と指差呼称して安全を確認。業

という情報を書いたメモを挟んでくれます。
本のタイトルが読めなくても、注文した
先生の名前の平仮名とメールボックスの
番号を確認しながら配達しています」と
有吉さん。

「村田チーム」のその日の配達先は、東
亜経済研究所と経済学部、国際総合科学
部の3カ所だ。3人は書籍の入ったコン
テナを受け取るとバンドでしっかり台車
に固定して、広いキャンパス内で安全確
認をしつつ、きびきびと歩く。

配達先の事務室に着くと、帽子をとっ
てあいさつ。書籍を汚さないように白い
手袋をはめてから、村田さんが教員名を
読み上げ、コンテナから書籍を取り出す。
坪井さんが教員のメールボックスの番号
を読み、齊藤さんがメールボックスの位



配達先の事務室にあいさつ

置をさし示し、村田さんが書籍を入れる。
お互いが確認しあい、3人の連携はスム
ーズだ。最後に事務室で「BOOK便が
終わりましたので、帰ります。ありがと
うございました」とあいさつ。空になっ
たコンテナと台車を総合図書館に返却す
る。配達を終えるまで約1時間。有吉さ
んが、指導者が一緒に回る理由を教えて
くれた。

「メールボックスに入れる作業は安心し
て彼らに任せられるのですが、学内は車
が通り、学生さんの自転車も多いので、
安全第一に配慮して指導者がついていつ
ています。その辺がクリアできると、お
おむねスタッフだけでできると思いますの
で、完全に任せられることを目指しています」

村田さんと坪井さんは業務支援室設立
時に、齊藤さんは2011年に採用され
た。齊藤さんは数字と名前を覚えるのが
得意で、間違いがあると必ず気づくそう
だ。

「3人が協力して、いい仕事をしてくれ
ています」と、その仕事ぶりを、有吉さ
んも認めている。BOOK便の経験を活
かし、大学に届いた郵便物などを配る学
内便をトライアル中だ。

**やりがいを感じながら、
業務をこなす**

業務支援室の主な仕事は、BOOK便
のほか、緑石清掃、花壇づくり、シユレ

職場 ルポ

パソコン入力業務をする
道永麻美さん
(給与福利センターにて)



ッダーや発送、データ入力などの事務作業と、山口大学教育学部の学生・研究生の職場体験、特別支援学校などからの現場実習の受け入れがある。外部からの見学を積極的に受け入れ、スタッフ自らが自分たちの仕事を説明していくうちに、コミュニケーション能力が高まってきたという。

業務支援室内で行う業務は、シュレッダーによる不要書類の裁断作業ぐらいで、パソコンでのデータ入力は、依頼元の給与福利センターなどに交代で出向いていく。縁石清掃は、急ぎの作業が入らない、雨が降らない日に行う。キャンパスにはケヤキ、



花壇の水やり

イチヨウ、サクラなどの大木がたくさんあり、落ち葉の季節の作業量は膨大になるとか。

花壇づくりは年2回、夏秋と冬春の花を植え替える。プランターや花壇から枯れた花を取り除き、土壌づくりをして、一定の大きさに育った苗を新たに植える。その作業について、道永麻美さん（24歳）が教えてくれた。

「何回やっても完璧にできることはないので、その都度、勉強です。大荒れの天気や急ぎの事務作業がないかぎりは、夏は毎日水やりをしています。夏は、ヒヤクニソウとマリーゴールドとヒマワリが咲いています」

道永さんは2011年4月に採用された。縁石清掃、BOOK便、花壇づくり、パソコンのデータ入力などをこなしている。

「一番好きなのは、雨上がりの軟らかい地面から、抜きやすい大きさの雑草をスパスパ抜いていくことです。気持ちいいです。仕事をしているときに最も気をつけていることは、身の回りの安全です。自動車の免許を取る前は『車に当たらない方がいいかな』と漠然と思っていました。自分が巻き込まれないために、ほかの車や歩行者、自転車をちゃんと意識しています」

仮免も本免も学科試験も1回でパス、運転免許証を取得した。

「休みの日は、自宅の周りの畑や山の上の祖母の畑で農作業をしています。これからは、大きな病気をすることなく、健康でいられたらいいと思います」

岡本亮祐さんは、スタッフのなかで一番若く21歳。防府総合支援学校を卒業して2013年に採用された。

「3回実習をして、やりがいのある職場でいいなと思って入りました。入ってから、思いは同じです。秋には葉っぱが多く落ちるので、きれいにするのはやりがいがあります。スカッとする感じ。特別支援学校から実習にくる後輩や、山口大学の学生さんに縁石清掃のやり方を教えたりののも、やりがいがあります」

ダメなことはダメ、「それは違う」と仲間のスタッフにきちんといえるのが、岡本さんのすごいところとか。

「職場では、いろいろな人とかかわり、コミュニケーションをとるのが楽しいです。うれしいことは、働いたら給料ももらえることです。趣味はバスケットボール、ポッチャ、風船バレーなどのスポーツレクリエーション、サイクリングです。まだまだ未熟です。これからいろいろな仕事をできるように、将来は先輩から頼りにされるような立派な社会人になりたいと思います。一人暮らしをして、結婚もしたい。これからはがんばります」

WORKSHOP REPORT



室長の有吉義和さん(右)と
専門職員の三原敏秀さん(左)

成長して巣立ち、 自立してほしい

業務支援室では設立以来、「健康・チームワーク・労働意欲」をキーワードとして掲げている。毎日の朝礼で、その日の当番が「健康!」というのと、全員が「心と体!」と唱和。以下、同様に「チームワーク!」、「思いやり、協力」、「労働意欲!」、「技術の向上、休まない」と唱和して、1日の作業を始める。

設立当初から働く吉本さんに、感想を聞いた。

「一言でいえば、みなさんに『感謝』です。スタッフを辞めさせないことからスタートして、2年目までは無我夢中、3年目から余裕ができてきました。支援員の方からスタッフに対する支援の仕方や学び、『業務支援室の運営をどうしたらよ



枯れた花の取除き作業をする岡本亮祐さん

「退職した支援員の方が課題としていた、『働くとは?』の意味や、働くモチベーションを教えることが、なかなかむずかしいですね。スタッフがついてくるためには、指導者が働く姿勢を見せることが大事だと思います」

技術指導員の武谷彰弘たけやあきひろさんは、縁石清掃などを担当して5年目になる。

「それぞれ特性があり、体力もまちまちです。外で一緒に作業をしています。後ろ姿ではなく、横についてちゃんと働く姿を見せていくのが大事ですね。花壇の水やりや縁石の清掃を続けてきました。2、3年前から教職員の方からも『きれいですね』とお褒め(ほめ)の言葉をいただけるようになって、励みになります。私も成長させていただきましたが、彼らの成長はすごいですよ。スタッフ同士、思いやりを大切にしてほしい。幸せになって

ほしいです」

業務支援室の礎を築いた支援員2人が高齢になり退職。現在もその2人の指導内容が生きているが、後任の採用が課題になっている。

室長の有吉さんは、退職した支援員が目標としていた、「精神的自立・職業的自立・社会的自立」を踏襲とうしゅうしていきたいと話す。

「スタッフのみなさんは素直で純真です。理解力の高い人もいます。日ごろからパソコンの入力業務をしていますので、業務支援室で成長して、事務など、ここ以外の学内の職場に入っていけるようになるばと思っています。外に出て自立していくことを一番の目標にしたいですね。スタッフが巣立っていくと、次の特別支援学校の卒業生が入ってこられます。将来独立り立ちしていけることを大切にしたいです。また、地域の基幹総合大学として社会的責任を果たしていきたいと思っています」

取材した日は、猛暑だった。炎天下のなか、花に水やりをするスタッフの姿は、教職員や学生の目に留まっているに違いない。スタッフの真面目な働きに比べて、黄色とオレンジ色のマリーゴールドが元気づけていた。

大学ならではの業務といえる「BOOK便」。スタッフは、その責任もしっかり果たしていた。